

炭鉱社会における親密圏の生活戦略

The Life Strategy of the Intimate Sphere in Coal Mining Societies

佐々木 祐（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）

【メンバー】

木村 至聖（日本学術振興会 特別研究員 / 京都大学大学院文学研究科）
井上 博登（早稲田大学大学院人間科学研究科 博士後期課程）
中島 満大（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程 / 日本学術振興会 特別研究員）
永 吉 守（福岡工業大学 非常勤講師）
西牟田真希（関西学院大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程）

【ねらいと目的】

本研究は、昨年度の次世代研究ユニット「移動する家族の生活史—旧産炭地を事例として」（代表：永吉守、世話人：木村至聖）の継続プロジェクトである。昨年度は、戦後日本の工業化の流れのなかで形成された炭鉱社会（主に旧三池炭鉱、旧端島炭鉱）において生活した人々の生活史を収集し、家族や地域コミュニティといった親密圏の視点からそれらを再考した。とりわけ、本研究では元炭鉱労働者（男性）だけでなく、その家族の女性や、炭鉱の周辺地域に住んでいた人々などへの聞き取りを重点的に行なうことによって、一面的でないより豊かな炭鉱社会の生活史を描くことを目指した。この成果として、戦後日本の混乱や急激な工業化、そして労働争議や炭鉱事故、石炭政策の転換による閉山、それにとともなう地域経済の崩壊といった出来事に、人々が親密圏の枠組みを巧みに変容させながら対処してきた様子を多面的に描き出すことができた。本年度は、この昨年度までの研究成果を理論的に整理し、人々が脱工業化という産業構造の転換をどう生きてきたのか、家族・地域という親密圏単位での実践・戦略についての見取り図を描き出すことを目指す。

【活動の記録】

2010年1月16～19日

井上、木村、永吉 田川市石炭・歴史博物館他への聞き取り調査、および読書会
福岡県田川市

対象書：高橋伸一編『移動社会と生活ネットワーク — 元炭鉱労働者の生活史研究』
高菅出版 2002年

2010年2月4～7日

井上、木村 長崎市立図書館での資料収集、NPO への聞き取り調査 長崎県長崎市

2010年2月16日

木村 GCOE 研究成果報告会「炭鉱社会における親密圏の生活戦略」

2010年3月15～16日

井上、木村、中島、永吉、西牟田 プロジェクトの総括、および読書会
対象書：タマラ・K・ハレーブン（正岡寛司監訳）『家族時間と産業時間』
早稲田大学出版部 2001年
市原博『炭鉱の労働社会史』 多賀出版 1997年

【成果の概要】

昨年度は半年間という非常に短い期間に 30 名以上の方の生活史を聞き取ることができた。それぞれの生活史を報告書の原稿にまとめるにあたり、執筆担当者による草稿を話者に確認してもらい、必要があれば修正などのやり取りを行なったため、報告書の作業が今年度までずれこんだ。だがその過程で、今年度の共同研究の目的である、聞き取りの成果を理論的に整理する作業も並行して行なわれた。

昨年度の聞き取りの成果をまとめるにあたり、先行研究を整理し、それらとの関連から本共同研究の成果を位置づけるため、重要文献の精読・読書会を行なった。

市原博『炭鉱の労働社会史』（1997、多賀出版）は、「炭鉱社会」を、炭鉱会社と労働組合によって労働者たちの私的／公的空間が編成され、地域社会へのアイデンティティのきわめて強い、一面では画一的・閉鎖的な社会と特徴づけている。だが同時にこの特徴は、明治以降の国家主導の産業化の流れの中で、様々な葛藤や抵抗をはらみつつ徐々に形成されてきたものであった。

そのため、炭鉱社会の性質について論じる際には、それが炭鉱社会の発展・変容のどの段階の話であるかに注意しなければならず、加えて、北海道／九州などの地理的な差異以上に、中央財閥系／地場大手／中小炭鉱といった区別が重要な変数であることが確認できた。

さらに高橋伸一編『移動社会と生活ネットワーク』（2002、高菅出版）によれば、戦後の相次ぐ炭鉱の閉山にあわせて、「労働力流動化政策」の導入という大転換がなされ、その後の労働市場のあり方、ひいては家族のあり方が大きく変容するきっかけとなったことが指摘されている。

つまり「炭鉱社会」は、産業社会の出現に対応する行政／会社／労働組合／家族といった諸アクターの葛藤の末生れた、親密圏と公共圏の混然一体とした共同体であり、その完成と同時に解体し、現在に至る家族・労働市場の基礎を残していった「消えゆく媒介者」だったのではないだろうか。

昨年度の聞き取りの成果は、この完成／解体期の炭鉱社会の生活史として位置づけられる。



田川市石炭・歴史博物館の二階からの眺め
（右手前は三井田川炭鉱の伊田堅坑槽、
左奥は香春岳。）

